

プロテスタントにおける教会と宣教の相互関係 ——宣教学的的一考察——

西岡義行

激動の二十世紀のから、新たな世紀に入ったとはいえ、二千年の宣教の歴史を回顧し、これからの宣教を展望することが十分なされているのだろうか。世界規模で考えるなら、十九世紀以来の近代化が二十世紀につきつけてきた問題は野放しにされ、人類の存続すらも脅かす環境問題に発展してきたことは周知の通りであろう。本論文では、教会と宣教の関係を目を向けて、今問われている課題が何であるかを問うていきたい。

さて、最大の危機は忍び寄る危機に気付かないことであり¹、日本の教会の危機も、忍び寄る危機に本当の意味で気付いていないということにあるのではないだろうか。では一体私たちがどこにおり、どのような危機に直面しつつあるのかを捉えようとする営みをもって、教会に仕えることは、宣教学の一つの重要な使命である。日本の福音派の教会は、宣教の働きによって個人個人に福音を伝え、教会に導き入れるが、結局は閉鎖的な教会の世界を作り上げるが、その中に入ってくる人の数に一喜一憂し、歴史の現実とかけ離れてしまったという、批判を耳にして久しい。逆にその閉鎖性を打破して外に出て、社会の現実に入って社会の変革を訴えた人々も、実際は多くの教会で行き詰まっているとも聞く。もちろん、例外もあるだろうが、こうしたことが教会の閉塞状況と無関係ではないだろう。はたして、教会が潔さを保つ

ために世俗と一線を引くことと、混乱し腐敗した社会の現実には大胆に入っていくことと、どう関係しているのだろうか。その両者の間でどっちつかずの姿勢を取る中で、宣教の情熱を失ってしまったのみならず、世の現実に入っていくこともなく、にもかかわらず世の問題が教会に入り込んできているとしたら、それを放置することは危険なことである。教会のこのような傾向が生み出されるには、具体的な歴史的な状況や、神学的な背景があり、さらにそれらを見えないところで支える世界観が潜在している。今求められているのは、解決策である以上に、真の問題の所在を突き止めることであろう。この小論文で、その問題の核心に教会と宣教の分離があることを論じていきたい。

I. 宣教と教会の類型論的考察

プロテスタントにおいて、教会と宣教は様々な形で捉えられて来た²。それらを手短にいくつかのタイプに分けて紹介したい。もちろん、このような試みは単純化による教会や宣教理解への誤解、曲解、偏見を招くことも考えられるが、あえてタイプに分けることでそれぞれの特性を明確化出来るという利点に注目したい。そこで、宣教と教会の関係には大まかに見て四つに分けられ、現在それら全てを乗り越える新たなタイプが模索されてる必要がある。まずは、その四つのタイプを概観してみたい。

A. 教会の付属物としての宣教

第一のタイプは、宣教を教会の付随的なものとし、特に宣教を海外や地理的、社会的、また文化的な境界線を越えた領域での働きとして認識されるものである。ここでいう宣教は教会の働きの中心というよりは、付加的なもの

² カトリックやギリシャ正教はここでは扱わない。しかし、これらもタイプとしては論じられる必要はある。タイポロジーとしては、Avery Dulles が *Models of the Church* で教会観を五つのモデルで論じているが、彼のモデルは、教会全体を扱うものであって、この論文では教会と宣教の係わりに焦点をあてている点に留意していただきたい。

¹ D. ボッシュ、『宣教のパラダイム転換上』19頁

とされる。このタイプに沿って「海外宣教」という言葉を理解するなら、宣教は海外においてなされるものであり、伝道は国内又は教会の置かれている場でなされる。実際海外宣教は、教会の力が充分備わり、その働きにおいても経済面においても、さらには人材においても余裕ができてから取り組む領域であるとされる。

付属物として宣教を見る場合、宣教活動も宣教師も、教会にとっては特別なものとされる。というのは、宣教は教会の回りの地域ではなく、国外または、社会的、地理的、文化的、民族的な壁を乗り越えたところに派遣するという意味で理解されるからである。宣教またはミッションは特別な派遣を意味し、教会の特殊な領域として位置付けられる結果、教会の働きは二分される。すなわち、教会形成に直接つながる伝道牧会の働きと、一定の領域を越えたところの「宣教」という区分であり、たいていは前者が後者に優先されるものとして捉えられる。特に西欧キリスト教国においては、宣教はもっぱら海外または国外での異教のはびこる地における働きを指していたのである。この教会と宣教の対立構造が如何に宣教に、また教会にもダメージを与えたかは、最近の宣教学において注目され始めている³。

B. 教会の核としての宣教

次のタイプは教会の中核に宣教を位置付ける立場である。宣教は教会の特殊な部門でも働きでもない。宣教は教会の中心的な要素であり、それなしでは教会が教会ではなくするという意味で教会の中核を担っている、という理解である。ここでは、教会の存在そのものが神から派遣（ミッション）されたものであるとして、より広い視点で教会が理解されている。第一のタイプに見られたような宣教と教会の対立構造はここにはない⁴。

³ Charles E. Van Engen, *Mission-on-the-Way*, pp.148-56. Wilbert R. Shenk, *Write the Vision*, pp. 33ff. Douglas John Hall, *The End of Christendom and the Future of Christianity*などを参照。

⁴ 宣教を教会の核にもってきたのは、今までの視点からのパラダイムシフトと言えるものである。ボッシュ(David J. Bosch)は『宣教のパラダイム転換』の中で、このシフトを宣教の神学という視点でより詳しく論じたが、彼はとりたてて教会

この新しい宣教と教会の理解においては、宣教なしに教会はなく、教会なしに宣教もない。両者の間にある種の統合がみられる⁵。さらにここでは、教会の全ての働きが宣教という視点で捉えられるのであり、宣教の働きが宣教師によって進められるというより、むしろ教会そのものによって進められると理解する。いわば、教会が神からこの世に遣わされた宣教師なのである。地理的または領域的な枠組みの中で宣教が捉えられ、宣教と教会の二元論的な分離が明確であった第一のタイプとは、根本的に違うものである。この新しい視点はまさにパラダイム・シフトであり、このシフトのゆえに教会の意義や宣教の在り方が全く新しい角度から再検討されるようになっていったのである。多くの宣教団体の集合を示唆する複数形(missions)としての宣教から唯一絶対の神の宣教を示す意味での単数形(mission)としての宣教が多く学者によって意図的に用いられるようになったことは、このシフトを象徴的に示している⁶。これは、実際宣教学の学術誌、*International Review of Mission*の名前も、*Missions* から *Mission* への変更があったことでも知られている。

C. 教会を中心とした宣教

第三のタイプは、宣教の中心に教会を置くというものである。宣教の働きの一義的なものは、教会を開拓することであり、そしてその教会が成長することである。この教会と宣教の密接な関係は主に福音派に支持されているが、1960年頃まではエキュメニカル派の教会においても幅広く支持されてきたものである。

ここで、「宣教を核とする教会」と「教会を中心とする宣教」との間には微妙な違いがあることに注目していただきたい。もちろん両者とも宣教と教会

と宣教の関係については部分的にしか議論していない。

⁵ Van Engen, *God's Missionary People*, p.30.

⁶ Cf. Johannes Aagaard, "Trends in Missiological Thinking During the Sixties," p.13; Lesslie Newbigin *Truth to Tell: The Gospel as Public Truth*, p.121. 複数としてのmissionsはより具体的な働きや団体を指すが、それら全てを神のもとに包括する単数としてのmissionが明確に区別されて行った。

の密接な関係を保持しているが、前者は「神を中心」とした宣教観をもって、教会を再認識しているのに対して、後者は「教会を中心」とした宣教観であり、具体的には教会開拓、教会形成を宣教の働きの中心に置くことを意味している。敢えて極端に表現するなら、前者は教会が神によってこの世に置かれていること自体が宣教であるとするのに対して、後者は福音伝達によって回心した者の群れとしての教会を生み出すことなしに宣教を全うすることはないと主張する。教会成長運動はこの後者の流れに沿って、さらに数の論理や経営管理術などのプラグマティックな方向に展開されていったと見ることができる⁷。

D. 教会を越え世を軸とした宣教（神の宣教）

宣教と教会の構造的分離から脱皮した第二と第三のタイプでは、宣教と教会の密接な関係が違った仕方をもって表現された。しかし、再び教会と宣教との間に溝ができる視点が導入された。それは宣教を教会という枠組みを越えたところで捉えようとするものである。神の宣教は、教会の働きの及ばないところで既に始まっており、実際聖書においても教会の誕生以前に宣教は存在していたとして、教会を中心とする宣教への反動としてホーケンダイクによって主張され⁸、エキュメニカル派の特にその社会派において受け入れられた宣教観である。

この視点では教会ではなくこの世こそが宣教の場であり、具体的な社会の現実に神の支配をもたらし、そこに神の平和を実現することこそ宣教の中心である。もちろん教会そのものを否定してはいないが、教会の増殖と拡張を主目的とする教会中心の宣教は、世に開かれた本来の宣教を矮小化しているとして厳しく批判していくのである。

現代の宣教学における一つの重要な課題は、この宣教と教会とがどのような関係にあるかである。この課題は歴史的にも、神学的にも、聖書神学的に

も、さらに実際的にも検証されることが必要であろう。ここまでプロテスタントにおける四つのタイプを紹介したが、最近福音派の宣教学者の間にも、またエキュメニカルな立場の者の間にも、第三と第四を統合する動きがある。第二のタイプは最も聖書的であるように見えるが、実際は教会と宣教の関係について、神学的に展開されず、曖昧な表現や概念が充分深められなかった。この曖昧な理解には、解釈者の前提が入りこみやすく、宣教と教会の関係理解において、福音派とエキュメニカル派の主に社会派の立場を支えてきた前提がその後の第三、第四のタイプに表れたと理解できよう。宣教と教会のよりホーリスティックな視点を展開するには、西洋神学に支配的であった二元論的思考の枠組みを超えた新たな視点が必要であろう。しかし、それがいったいどのようなものであるかは、今後さらに探究されなければならない。

II. 「宣教—教会」関係理解の変遷

新たな視点を擁立する前に、現在の問題をより総合的に把握する必要がある。そのためには歴史的変遷を理解することを避けて通ることは出来ない。以下の項では、現象をより共時的に扱うタイポロジーでは明らかに出来なかった通時的、歴史的側面に注目して宣教と教会の関係理解の推移を概観してみたい。

A. キリスト教社会における宣教

四世紀のコンスタンチヌス帝の時代にキリスト教が国家の中でその地位を確立したことは、周知のとおりであるが、これを境にキリスト者は社会の周縁で、無視され、抑圧され、迫害される立場から一転した。それ以来、長期に渡ってキリスト教が社会の中心に組み込まれたのである。このキリスト教国家体制においては、世界はキリスト教国と非キリスト教国とに二分され、宣教は前者から後者への動きとして捉えられた。実際本格的な宣教活動はスペインやポルトガルといったカトリック諸国の方が時代的には先行していた。しかしそれは、十六世紀になってからであり、国家として世界との貿易が始まり植民地化政策がとられたことと重なっているのである。

⁷ 拙論「教会成長論再考」を参照。

⁸ J.C. ホーケンダイク、『明日の社会と明日の教会』

一方プロテスタントにおいてはその当時、宗教改革によって聖書信仰に立ち戻ったとはいえ、実際には世界宣教への発展は、少なくとも目に見える形では現われなかった。それは、例えば神の支配を強調する宗教改革の神学は宣教への動機付けにむしろ逆風となったこと、プロテスタンティズムの中にあってもそれぞれの派が対立していたこと、さらにはドイツにおける三十年戦争（1618～1648）による社会不安のゆえに目を世界に向ける余裕がなかったことなどが要因としてあげられる⁹。しかし、十七世紀の科学革命、十八世紀の産業革命などによって、プロテスタント諸国は次第に力をつけ、争うように世界進出し植民地化していった。近代のキリスト教諸国において見られた目覚ましい文明の発展によって、人類は今まで経験したことのないような形で地理的文化的壁を乗り越えていった。この歴史の事実の中で、福音が世界に伝達されていったことはまさに摂理の内であったと言うことが出来る。

しかし、宣教はいつも不完全な人間によってなされているゆえに、常に様々な問題を内在し、また露呈してきた。その問題を理解する上で重要なのは、その時代の西欧諸国を無意識のレベルで支えてきた世界観を検証することである。ここでは、それを詳しく分析することは出来ないで、その基本的な枠組みを把握することにとどめたい。それは、前述したように、キリスト教社会のもつ二元論的な「キリスト教国—非キリスト教国」または「西洋—非西洋」という枠組みである。一方は文明開花し、他方は未開であるとして上下関係をそこに見ていく。宣教は暗黙の内に築かれていったこの世界観に沿って把握され、福音の流れは北から南へ、または西から東へという一方通行的なものとなった。この「西洋」から「非西洋」への単一方向的な宣教の枠組みは、十九世紀、さらには二十世紀に至るまで、教会と宣教の在り方を多くの部分で規定して来たのである。そして「宣教」がキリスト教社会の外での出来事として、また世界の周縁、遠い所においてなされる事として位置付けられていき、教会にとって余裕が出来てから取り組む付属物として扱われ

⁹ J. Herbert Kane, *A Concise History of the Christian World Mission*, pp. 73–75. cf. Bosch, "An Emerging Paradigm for Mission," p. 491.

ることとなったのである¹⁰。

B. 教会における宣教の新たな位置づけ

キリスト教社会の枠組みの中で形成された「宣教」は教会にとっては付属的であり、また伝達の在り方という点では一方通行的であり、その内容は西洋文明の模写として現われていった¹¹。ここでは福音と西洋文明とが癒着し、非西洋文明は異教のもの、俗なるものとして基本的に否定されていくこととなったのである。宣教の一つの結果として出現してきた宣教地における新しい教会は、いかにも西洋風の様相を呈しており、土着の文化や人々との間のギャップが次第に問題となっていった。そのような中で宣教の在り方を根本から問い直そうとする学問、すなわち宣教学が発展していった。しかし、二十世紀に至るまで宣教学は明確なかたちで教会論との関係を築くことが出来なかったのである。

その背景となった状況を少し概観してみたい。まず、十八世紀の世界宣教は主にヨーロッパからの貿易商などの移住によってキリスト教が持ち込まれる形で広まるという傾向が強かった。とはいえ、宣教と教派的な教会とはそれなりに近い関係にあった¹²。それに対して、十九世紀以後のリバイバル運動を機に起されたプロテスタントにおける近代の宣教運動は、より明確なヴィジョンによって出ていくという傾向が強くなり、伝統的な教会や教団の枠組みを超えたところで進められていったのである¹³。さらに、教会と宣教の関係

¹⁰ cf. Bosch, "An Emerging Paradigm for Mission," p. 491.

¹¹ シェンク、「文化脈化に向けて」現代の宣教パラダイムにおける三段階、88–92頁

¹² James A. Scherer, *Gospel, Church and Kingdom: Comparative Studies in World Mission Theology*, pp.10–11.

¹³ 具体例として多くの宣教の働きはハドソン・テーラーによって始められたフェイス・ミッション・ムーブメントやR. P. ウィルダール、D. L. ムーディー、J. モットらによって始められた学生ボランティア運動（Student Volunteer Movement）や、聖書翻訳協会などの超教派的な宣教団体が次々に宣教師を世界に送ったのである。これらは、既存の教派の枠組みを超えて一致しようとする方向にあり、これは、1910年のエディンバラにおける世界宣教会議に引き継がれていったのであ